

## 遺稿（未完）

# ミラノ時代の肖像画

柏木隆夫

ミラノ時代のレオナルドは、数点の肖像画を残している。その二点としてはピナコテーカ・アンブロジーアナ (Pinacoteca Ambrosiana) 所蔵の「音楽家の肖像 (Ritratto di musico)」(図1)と「真珠の頭巾をつけた女性 (Dama con retina di perle)」(図2)があげられる。

「音楽家の肖像」は、楽譜を胸前に持った音楽家の上半身を描いており黒い胴衣に黄土色チョッキを身につけている有様をそのまま特別の意図もなくそのままえがきだしている。

帽子も赤色であるが、この三色のうちチョッキの部分はほとんど顔料がつかわれておらず油で溶いた僅かな顔料を半透明に塗り上げている。レオナルドの意図は卒直なまま示され描き上げられており、その画風を明確に示している。音楽家の相貌は左前へ視線を向けて描かれている。ここでは、その魂の有様がそのまま描きだされており、十分なレオナルドの力量を示している。

「真珠の頭巾をつけた女性」の方は、フランドル風或いは北イタリア風の明暗処理を採用しており、「音楽家の肖像」の場合とは違って、明暗処理をもつばらの目的として、その中で宝石を実在感を持つて描きだしている。この緻密な画風は伝統にもとづくものであり、それにもとづく制作を独自の画風をもったレオナルドが試みるとは思えない。これはミラノの画家の制作によるものであり、そう考えられる場合はアンブロジオ・デ・プレディス (Ambrogio de Predis, 1455-1508) の手になるものと考えられるのが常である。それは尤もな説であり、そのまま受け入れて良いかと考えられる。

更なる一点としては「白てんを抱く女性 (Dama dell' ermellino)」—— (Cracovia, Czartorski museum) (図 3) がまだ残されている。それは白てんを胸に抱いた女性が左肩越しに視線を投じている姿を描きだしており、その有様はごく自然なポーズと心理を表現している。その若々しさを物語っている表情はかなりの心理にもとずいており、この作品の他に例をみない特色をもがたっている。モデルはロドヴィコ・イル・モロー (Lodovico il Moro) の愛人であったチエチリア・ガレラーニ (Cecilia Gallerani) であった。白てんは、ガレ (Galle) を意味し、モデルの名称を物語っている。

イサベラ・デステ (Isabella d' Este) は、千四百九十八年四月二十六日チエチリア・ガレラーニに次の手紙を残している。

「本日、ゾアンネ・ベルリーノ (Zaanne Bellino) の手になる数点の美事なる肖像画を觀賞の機会これあり、レオナルドの作を論じますにつけ、見比べのため眼のあたりに致したき思いやみ難く、そなた様をモデルにものせし肖像画に思い到り、文とども差し遣わします御者にお託しあつて、そなた様肖像画お遣わし下されたく願ひ上げます。さすれば比較にかなうのみかは、そなた様面影にまみゆるよろこびもこれあるべく、見比べましたる後はときをおかず

お返し申し上げますば・・・」(註1)

これに対する返信は次の様なものである。

「高貴にして極みなき我が敬慕の君、そなた様差し遣わされましたる、わが肖像御覧なりたき由の御旨拝受いたしました。この似姿にして我が身に似通いおりますれば、なお進みてお送り致すべきところながら、既にそなた様レオナルド師に瑕瑾あるべくもなしと思し召され、ごこもとまたまご師に比肩し得るものあるまじと存じおりますれば、ただ一事は、この肖像画いまだ未熟の年端に描かれしものにて、その後の面がわりもはなはだしく、絵とごこもともにお比べあれば、必ずやごこもとを描きしものと思さるる方あるまじと存ぜらるることのみ・・・。メディオラムにて、千四百九十八年四月二十九日」(註2)

これらの便りは、既に姓名がベルガミーニ(Bergamini)にかわっているけれど、その本人はチエチーリアのことである。この肖像画は本人がまだ少女に近かったところに描かれたものである。そのほっそりとした身体つきと遠くに投げられた眼差し、白てんを抱いている繊細な手つきにそれがあらわれている。他に例を見ないそれらの表現はレオナルドによるものであろう。

ただしその仕上げはいささか貧弱な傾向をみせており、左肩に掛けられた衣服の青白い色彩が最もそれを物語っている。それは面長なモデルの表情とも響き合っている。それはこの作品が、ミラノにおけるレオナルド工房によって仕上げられた物であることを物語っている。

もう一点「額飾りを着けた女性 (La belle ferroniere)」(Paris, Musée du Louvre inv. 778 - M. R317) (図4) がある。それは、ロレンツォ・イル・マニフィコの愛人であったルクレツィア・クリヴェリ(Lucrezia Crivelli)をモデルに

したものである。モデルは手すりの向こう側に左向きに存在し、その左肩ごしに眼差しをこちらへ向けている。その背景は暗く、これはレオナルドが千四百九十二年前後に書き残している絵画論の中の断片を反映している。

顔に優雅さ与える大気の選択について

影は一般的なものの特性である、全てその始まりにおいてより力強く逆に最後にかかわって弱くなる、それは、もし君が、中庭に布で覆える空き地を持つならばその光は好いものであり、あるいはある人物の肖像を天候の良くない夕方、肖像主を上述べた中庭の近くの壁面の近くに位置させれば良い。通りを行く場合、夕方道端で男、女の顔立ちがどれほどの優雅さと甘美さを見せるかに注目すべきである。それ故闇は影の最初の段階であり光は最後の段階である。それ故君画家は最も

その事情に依じてより暗い影目的に依じた光、レオナルド

(句読点を二箇所変更した以外は、すべて遺稿原稿のままに掲載した。)



図1 レオナルド・ダ・ヴィンチ《音楽家の肖像》  
ピナコテーカ・アンブロジアナ（ミラノ）



図2 アンブロジオ・デ・ブレディス  
《真珠の頭巾をつけた女性》  
ピナコテーカ・アンブロジアナ（ミラノ）



図3 レオナルド・ダ・ヴィンチ工房  
《白てんを抱く女性》  
チャルトリスクイ美術館（クラクフ）



図4 レオナルド・ダ・ヴィンチ  
《頬飾りをつけた女性》  
ルーヴル美術館（パリ）

# 遺稿と闘病生活 — 柏木珪子夫人の談話をもとに

## 一 はじめに

柏木先生の遺稿『ミラノ時代の肖像画』は、ワープロによる原稿であるが、その末尾に「レオナルド」という手書きの文字が添えられている。先生の前稿が、これまで必ずといって良いほどブルー・インクの達筆で書かれていたことを知る人は、これらのことを不思議に思うかもしれない。しかも末尾に添えられた文字は、筆圧の強い先生の力のかもつた文字とは異なり、細く優しい線からなる。これは、先生の執筆と闘病を支えた多くの派遣看護師の一人が、先生の最期の意思を読み取って書き添えた文字なのである。

未完のまま終わったこの遺稿を公にすることに、躊躇がなかったわけではない。特に、先生の執筆を終始見守ってこられた珪子夫人は、元氣なときの半分も資料を使えなかつた今回の原稿が、故人にとつて納得のいかないものであろうことを懸念された。しかし、その闘病生活の厳しさと、最期まで執筆の意欲を失わなかつた先生の無念を拝察するに、この原稿を闘病の様子と共に公表することは、先生の後塵を拝しながら進むべき我々にとつて真に意義深いと思われる。そこで編集担当者は、夫人の談話を「病氣のこと」「執筆のこと」「最期のこと」の三項目にまとめて遺稿

に添えることで、補うべくもない未完の補足とした。合わせてお読みいただき、在りし日の先生を偲ぶ縁としていた  
だきたい。

## 二 病氣のこと

先生の異変に気づいたのはいつ頃のことだっただろうか。ゆつくりと話されても言葉が聞き取りにくいと学生がも  
らし始めていたころ、先生はそれが入れ歯の不具合のせいだと思い、まず歯科医に行かれた。しかし、何度入れ歯の  
調整をしても改善されなかったため、歯科医のすすめにしたがって内科に移ってはみたものの、CTスキャンやMR  
検査を繰り返しても異常なしとの結果しか得られなかった。ちょうど平成十二年度の入学式のころ、さらに舌がもつ  
れる自覚症状もあつたようなので、山岡先生が京大病院での検査をすすめられたが、授業に対する責任感から、夏休  
みになってから検査入院を受けられた。京大病院で四回のMR検査を受けたが、頭頂部の、運動や言語障害が起こり  
そうもないところに、米粒ほどの梗塞が発見された以外はさしたる異常も発見されず、さらに筋電検査などを経て、よ  
うやく病名らしきものが出されたのが、同年秋のことだったそうである。

病名は進行性筋萎縮性側索硬化症、ALSと通称される難病である。京都府下で十数名、全国でも二千から三千人  
ほどの罹病者を数えるだけの、臨床データの少ない疾病で、原因不明のまま難病に指定されている。発病翌年の秋に  
瑠子氏が読まれた新聞記事によれば、体内の蛋白質が分解するときに発生するある種の酵素によって発病するらしく、



ノーベル賞を受賞した田中耕一氏の研究に見られるような、蛋白質定量解析の方法等の技術面での進歩と、医学的な分野の研究が進歩してゆけば、原因の究明もなされるだろうとのこと。しかし、現時点では原因不明のため薬もなく、二次的な栄養補給や発熱などへの対処療法として、既存の薬に頼らざるをえないという。

この病気の特徴は、体中の筋肉が徐々に萎縮することにある。しかしながら意識がはっきりしておられた分、思うように身体が動かなくなっていくことに対して、さぞかしもどかしい思いをされただろうと、胸中察するにあまりある。退職を決意されたとき、事情のあまりわからない我々は『哲学』の退職記念号のためにと論文執筆を依頼した。後から思うに、それが負担だったのではと心配だったが、夫人から闘病の励みになったとうかがって多少救われた気持ちになったものの、その執筆の様子は壮絶の一語に尽きるものであった。

### 三 執筆のこと

発病後もイタリヤ美術に対する先生の情熱は変わることなく、平成十三年十二月には『哲学』二十一号に発表された「ドメニコ・ギルランダイオの業績」を仕上げておられる。最後の手書き原稿となったこの論文が出来上がった頃には、ほとんど口もきけなく、離乳食状にした食事も飲み込めなくなり、筆圧の要らないサインペンによる筆談でコミュニケーションを図っておられたようである。しかしやがて、右手に麻痺がきてそのサインペンもポトポトと落とすようになった頃、派遣看護師の方々の手ほどぎでパソコンの練習を開始された。それぞれ一時間の在宅看護だった

が、その間看護師がシフトを押して柏木先生が左の指一本でキーを押すといった形で練習を積まれたようである。遺稿の原稿は夏の頃から少しずつ進められたが、まる一ヶ月をパソコンの練習だけにあてたような時期もあったとのこと。先生ご自身もこんなに早く逝かなければならないとは思っておられなかったようで、早く取り掛かっていたら完成していたかもしれないと、夫人は悔やまれる。

平成十四年の十二月に発熱のため入院されるまでは、しかしながら、挙げることでできない腕を、ダンボールやタオルで工夫してパソコンと同じ高さに保てるようにして、指一本ではあってもキーを押すことができていた。しかしながら、三週間の入院を経てクリスマス・イヴに戻られたときには、両手がおもちのように腫れ上がり、もはやキーボードを押すこともできなくなっていた。あれこれ言葉をかけて、わずかに振られる首の動きを見る以外に、意思の疎通も難しくなってきたのである。

その一方で、難病者に対する支援策として行政に障害者用パソコンを申請することができたので、イタリア語やフランス語も使えるようなパソコンを探し始めた。ちょうどその頃業者の人が、京都の国際会議場で開催されたパソコンの見本市で、アメリカの方が開発した、触れただけで文字変換のできる非常に大きなキーのついたパソコンなどの中から、使えそうなものを見つけてくれたそうである。しかし、障害者手帳には病気の初期段階のことしか記載されていないため、記載事項だけで判断すると当該パソコンの使用が必要とは見なされなかったため、実情に合わせると再度診断書を取り直すなど手続きをやり直している矢先に先生は亡くなられたのである。役所に障害者手帳を返却しに行ったら、手続きの手違いで希望に添えなかったことを、大変に残念がられたという。

最近の障害者用パソコンには、手の使えない人のために、まばたきをしたり息を吹きかけたりして信号を送るだけで、それを文字に変換できる機械もあるようである。とはいえ、そうした機械を選択し申請して入手するまでにはか

なり時間がかかる。パソコンが届くまでの工夫として、五十音図を見せて、横の行、縦の列を順に示しながら、それぞれに対する首の振り方で文字を選ぶという手続きで、一字一字を拾っては文を紡ぎだしたが、そのうちに首の振り方も縦か横か判別しがたくなつたらしい。この病気は最後には眼球しか動かなくなるため、その状態での意思疎通を工夫しておく必要があつたので、透明の亚克力板に五十音図を書いてそれを先生の目の前で動かし、その目を正面から見ながら目が合つたら「イエス」で、そこで目をそらされたら「ノー」というサインの取り決めをして意思疎通を図つたそうである。この気の遠くなるような作業の中で、本の色や厚みで特定された参考文献を開き、何とか特定されたページを示すなどされてきたご家族の尽力には真に頭が下がる思いだが、その夫人が感謝して止まないのが、各病院の先生、看護師、介護士、リハビリに手を貸して下さつた方々、中でも派遣看護の方々である。パソコンの手ほどきをしてくれた方、パソコンができなくても看護ステーションで特訓を受けて手帳にびつしりと手順をメモして来られた方など、身体のケアだけではなく心のケアこそが大切であることを片時も忘れることはなかつたという。遺稿は、先生の精神が、いろいろな方々の協力で形をなしたものである。

### 三 最期のこと

平成十五年二月の終わり頃から発熱を繰り返すようになり、抗生物質を点滴しても改善されないので入院し、人工呼吸器をつけてから一週間後に亡くなられた。亡くなる前日は目も閉じなくなつたが、瑛子夫人が手や腕をさすり

続けたら、丸まったままだった両手が、まるで奇跡が起こったかのように、真つ直ぐにすつと伸びたそうである。神様のご褒美かと感謝し、「手が治ったから向こうで残りの原稿を書いてください」と、未完の原稿のコピーとイタリア語の辞書と原稿用紙とを棺に収められたとのこと。葬儀の会場で拝した先生のお顔は随分小さく感じられたが、それは今後の研究用に脳を献体されたためであった。また先生の蔵書の一部も、家族の方々のご好意で、図書館および美学美術史資料室に寄贈されることになった。衷心より感謝申し上げたい。

柏木夫人の談話はさらに、三人の子どもへの優しくも厳しい父親としての愛情、イタリア美術への憧憬と留学で経験したイタリアの現実とのギャップ、山岡泰三先生や鷺田清一先生らと開いた展覧会のことなどにおよんだ。この談話を伺い、遺稿を拝読するにつけ、西洋美術史学がわが国に広く根付きつつあった時代に、見果てぬままに先生が見ようとしたものの、馥郁として典雅な香りの中に、今さらのように、ただそのままに浸っていたい思いがするのである。